

vol.2

2024年7月

Arai Darumaya

だるま屋通信

— 夏号 —

今号のtopics

Topics
1

ひらつか『七夕まつり』と荒井だるま屋

Topics
2

ユニクロの酒コレクションのTシャツに抜擢♪

Topics
3

だるまのお客様のご紹介♪

だるまの豆知識

Topics
4

来年の蛇の干支だるま製作中

Topics
5

高崎だるまについての全文掲載です

Topics
6

だるま屋通信はダウンロードして紙でご覧いただけます。
最適サイズはA4です。スマホなどでご覧いただく場合は、
ピンチアウト(画面を指2本で拡大)していただけます。

ひらつか『七夕まつり』 と荒井だるま屋

今年の七夕まつりは、ちょうど週末の7月5日（金）～7月7日（日）に開催されました。3日間とも暑いほどの晴天と、規制が緩和されたこともあり出店も多く、たくさんの方がご来場してくれて大賑わいでした。市のホームページやパンフレット、まつり会場に掲載されました七夕まつりのポスターをお目にした方もいらっしゃるでしょうか。実は荒井だるま屋4代目で書家でもある荒井星冠が【七夕まつり】の文字を書きました。山協印刷さんのデザインとコラボのポスターです。たくさんの方の応募の中から選ばれたので嬉しいものです。山協印刷さんより書を書いて欲しいとのご依頼があり、携わらせていただきました。だるまの繁忙期中にはなかなか書の仕事に時間を取ることが難しいのですが、オフシーズンでしたらご相談に乗らせていただきますので、お問い合わせください。



ラスカ平塚での販売の様子です。隣の出店は次のページで紹介させていただきます『長谷金』さんの商品です。ラスカのポスターでも掲載させていただきました。



今が旬のテーマのものや、特大ベルマーレ・特大ピカチュウ、学生が手がけたものまで、見ごたえ抜群の笹飾りです。ひらつか七夕まつり開催当初は商店街のかたの笹飾りだけから始まり、現在では幅広くなりました。お祭りを楽しみつつ撮影させていただきました。

ポスターやパンフレット、HPなど、
色々な場所に掲載していただきました！



販売では、ラスカ平塚や市民プラザで伝統の赤いだるまや干支だるまなど販売させていただきました。だるまは暮れのイメージが大きいですが、七夕まつりで毎年買いたいと思って足を運んでくれるお客様も有りがたくいらっしゃいます。工房は7月7日が日曜日なのでお休みを頂戴したのですが、7月5日と6日は通常営業をさせていただいておりました。遠方からのお客様がご来店してくださったのでお話を聞くと、荒井だるま屋で買い物をしてから、七夕まつりに行くんです、と楽しそうに話してくださいました。荒井だるま屋に寄っていただくついでに七夕まつりに行くもよし、七夕まつりのついでに荒井だるま屋に寄っていただくもよしですね。平塚は、観光やショッピングにお勧めの場所がたくさんあります。遠方のかたは観光も兼ねて是非とも工房にいらしてくださいね。

レモンスタジアム・ららぽーと・ジアウトレット・花菜ガーデン・海や山など、おすすめスポットを紹介しきれません。是非とも平塚に来てくださいね♪



Topics

2

Tシャツに抜擢

ユニクロの酒コレクションの



こちらの美丈夫の酒ラベルが
Tシャツに選ばれました!

濱川商店さんでは豊富な種類の美丈夫を販売しております。気になった方は検索してみてくださいね。

2024年のユニクロの酒コレクションのTシャツに荒井だるま屋4代目・荒井星冠が手がけました酒ラベルの美丈夫が選ばれ、Tシャツになりました。高知県の蔵元・濱川商店さんからのご依頼で10年以上前に手がけたラベルになります。この春のこと、ユニクロのホームページを見ていたら、あれ、これはもしかして4代目の作品では...と、驚きの発見でした。濱川商店さんにお聞きしたところ、パリのユニクロで日本のお酒のラベルをTシャツにしようと企画が上がり、フランスで人気の日本酒であり、かつ100年以上続く蔵元の中から選ばれてTシャツ化が実現したそうです。どの書もお相手に渡した後は自由にお使いいただいているので、その為、まさかそのような企画が進んでいるとは思わず、突然の嬉しい再会となりました。当たり前ですが、書いた当時は自分の作品がユニクロのTシャツになるとは夢にも思わず、早速普段着とコレクション用を買いに行きました♪(売り切れご免をご了承ください)



Topics

3

第2回
だるまのお客様のご紹介

今回のご紹介は、平塚市千石海岸にあります『花かつお製造元の長谷金』さんです。ひらつかタマサブロウ漁港(平塚新港)にある創業明治23年の老舗店です。

長谷金さんは3代目からの長年のだるまのお客様でもあります。わたくしども共々平塚市名産品・匠の店の認定店であり、平塚を盛り上げるべくイベントなどで一緒に活動させていただいております。



赤いだるまと干支だるまを神棚に飾ってくれております。隣の河童の水彩画は東京の浅草で活躍していた萩原楽一さんの作品です。河童を書かせたら萩原さんの右に出る人はいないのではと...



必見です!

『長谷金』さんの正面です。とても趣があり素敵な建物です。温かい雰囲気のお店で、居心地抜群です。

荒井星冠の師・田中真洲先生の書が飾ってあります!

店内には、定番の鯉節や昆布などはもちろん、他では手に入らないような長谷金さんオリジナルの商品も数多く並んでいます。商品もそうですが、店内もとても素敵で、こだわりがたくさん詰まったお店です。わたくしどもの食卓には長谷金さんの品が欠かせません♪

遠方のお客様へは、なかなか取材に伺う事ができませんが、いつか北は北海道から南は沖縄まで、たくさんのお客様を紹介するのを目標にしております!

だるまの豆知識

第2回

前は相州だるまのルーツとなった群馬県の高崎だるまをお伝えしました。今回は相州・荒井だるま屋の紹介です。

『相州だるま』は、神奈川県で作られているだるまのことです。現在、県内でだるま屋は残り2件となりました。昔は10件はあったので、随分減ってしまいました。伝統の赤いだるまは疫病のお守りとして、お客様が取り合うほどにそのご利益を必要としてくれた時代から始まります。荒井だるま屋でも1代目と2代目の時代は、リヤカーを引きだるまを売りに行っていました。リヤカーに積める数より買いたいお客様が多く、争奪戦になっていたそうです。今は、昔より遥かにだるま市などの規模も小さくなっており、荒井だるま屋ではオンラインストアのご注文が増えております。郵送ですと皆さまにお会いできませんが、全国はもちろん、海外のお客様にもだるまを届ける事ができることに、時代の流れを感じます。



相州だるま・荒井だるま屋の特徴

近年はだるまの顔を印刷できる機械が開発され、手作りではないお店も増えつつあります。これもまた時代の流れを感じます。もちろん、印刷が決して悪いわけではありません。ですが、長年だるまを作り続けてきて、1つ1つ手作りをすることで心が込もり強いパワーを投入できるのかなと思っています。皆さまにより強いだるまのパワーをお届けしたく、こだわりは他にもあります。だるまの目やお腹の文字を私どもは金のラメで施します。普通に金色を塗るよりも、これもまた手が掛かるのですが、見た目が華やかに見える以上に、強いエネルギーが込められています。

来年の蛇の干支だるま製作中

干支だるまはもちろん、赤いだるまも絶賛仕上げ中です。

蛇の干支だるまの後ろ姿を初公開♪



現在、来年の蛇の干支だるまの製作に日々励んでおります。春までにおおよそのデザインを決めて、今は2号のだるまのボディに粘土でパーツを盛り付けし、和紙を手作業で全体に貼る作業をコツコツ進めております。3000個以上を作るため、デザインが肝心で、考案にも時間が掛かります。皆さまに、かわいい蛇の干支だるま♪と、思ってもらえるよう全力です。

10月の発売予定になります。決まりましたら告知しますので是非とも楽しみに！

素材にもこだわりがあります。十二支集めていただいても劣化しないように、12年とは言わず、品質が長年長持ちできるように厳選しています。和紙は和紙職人が漉いた埼玉県の小川和紙を取り寄せており、素材・風合いを大切にしております。その和紙を小さくちぎって、1つ1つシワが寄らないようにデザインを盛り付け終えただるまのボディに貼り、数日乾かしてからいよいよ色付けになります。エアーガンでベースの色を吹き付けした後に各パーツを塗っていきます。1つの工程が乾いてからでなくては次の工程に入ることができない為、次から次には進みません。よく干支だるま1点をどのくらいの時間で作ることができますか？と、聞いていただきますが、正確に割り出せない程たくさんの作業工程があり、乾くまでに天候にも左右されてしまいます。春に製作に取り掛かり、秋冬まで製作がずっと続きます。手間暇かけた分だけ、お客様に喜んでいただけているのだと、思っております。

高崎だるまについての全文掲載です

前回の『だるまの豆知識』第1回で掲載しました高崎だるまについて、中喜屋5代目・峰岸貴美次さんから頂戴しました全文の掲載をさせていただきます。だるまの伝統工芸士であり人柄も素晴らしいお方です。全文を読んでつくづく思います、本当にだるま愛が強く、とても賢く、尊敬する職人でありコレクターです。

高崎だるまの先達

1. 高崎だるまの生みの親『山縣友五郎』

高崎だるまは、かつて豊岡だるまとも呼ばれ、江戸時代の後期、文化・文政年間の頃に山縣友五郎によって生み出されました。山縣友五郎は、1793年（寛政5年）に上豊岡村で生まれました。山縣の家は、古くは武田信玄の二十四将の1人として活躍し、江戸時代には名主を務める家柄でした。その為、代々の戒名には軒の文字があり、これは武家の名残のようです。山縣友五郎がいつから高崎でだるま作りを始めたのかという明確な期日を示す記録は見つかっていません。しかし、最近ようやく友五郎が亡くなった時の年齢が明らかになったことで、今まで始まりは寛政年間とされてきましたが、友五郎の誕生年から推測して、10代から30代の文化・文政年間の頃と考えられます。まさに、それを裏付けるように、文政12年（1829年）には、田町六斎市初市でだるまが売られている様子が高崎談叢抄の版画に残されています。山縣友五郎の子孫である元新島学園高校教諭の山縣英明先生のお話によれば、友五郎は若き日に人形職人を目指して、江戸の人形店に修行に行ったとのこと。当時江戸では疱瘡が流行り病となっていました。病に苦しむ人達にだるまは疱瘡除けのお守りとして江戸庶民の傍らにありました。友五郎はその当時売られていた江戸だるまに接し、郷里である上豊岡村に戻り、自らも工夫を重ね、病除けを願いだるまを作り始めたとのこと。江戸時代の豊岡地域でだるまを作っていたのは、山縣友五郎家を中心とした親戚縁者だけでしたが、田町初市などの賑やかな街中でだるまを売り、脈々としてその技法が伝承されてきました。江戸幕末から明治に入り、だるま木型彫り名人の葦名鉄十郎盛幸が上豊岡村に住み着き、生涯で何百体ものだるま木型を彫ります。山縣友五郎のだるま作りの技法と木型彫り名人の葦名鉄十郎盛幸のおかげで沢山の職人が育ち、全国に類のないだるまの大産地が出来上がりました。友五郎のふるさとである高崎・豊岡は、「だるまの里」と言われるようになりました。群馬県達磨製造協同組合は、大正4年（1915年）に現在の組合の前身である碓東達磨製造協同組合を発足して、友五郎の遺産であり、郷土の宝である高崎だるまの製造を続けてまいりました。また、平成27年（2015年）には組合発足から100周年を迎え、そのだるまの始まりについて様々な角度から経緯を追い求めてまいりました。明治に入り、市内・県内・県外とだるま市が方々で行われるようになり、高崎だるまは関東一円から全国に知られるようになりました。それゆえに、これからも高崎だるまを作り始めた山縣友五郎がどのような波乱万丈の人生を送ったのか追い求めていきたいと思えます。山縣友五郎は、生涯だるまを作り続け、1862年（文久2年）8月9日に69歳で亡くなりました。その戒名は「是法軒招庵常成居士」と言い、今年没後155年を迎えます。

2. 木型彫り名人『葦名鉄十郎盛幸』

葦名鉄十郎盛幸は、通称「鉄つあん」と呼ばれ、だるま木型彫りの名人でした。高崎だるまが今日日本一のだるまの生産地に成り得たのも生涯を通じて何百体ものだるま木型を鉄つあんが彫り続けてくれたからです。そのおかげで、豊岡を中心として沢山のだるま職人が生まれました。かつて一番多い時には88軒の家でだるま作りが行われていました。

全国では、多い産地でも10軒ほどで、1軒、2軒の産地では継承者不足で生産が途絶えたところが沢山あります。もしも、鉄つあんが上豊岡村に住み付かなかつたら、そしてだるま木型を彫り始めなかつたら、このようなだるまの産地は出来上がっていません。鉄つあんは、大変無口で酒の好きな人だったようです。あまり自分の事は語らなかつたようですが、金沢藩士（会津藩との説もある）の次男であった葦名鉄十郎盛幸は養子に行った先で折り合いが悪く家を出て、そのまま諸国を転々とした末に上豊岡村で病に倒れ、その後村人の快方など世話になり闇魔堂で生活をするようになりました。やがて、習い覚えた塗師の技術を生かして村人の重箱の塗り直しなどを始めます。更に持ち前の器用な腕で、のみや彫刻刀を振るい、だるまの型を作って見せます。それが、だるまの大産地の礎となるだるま木型作りの始まりでした。瞬間に木型を彫る葦名鉄十郎盛幸の名は広まり、多くの人に頼まれるようになりました。1軒の家で大から小まで50体～100体は作られたとして途方もない数の木型を生涯を通して彫ったことになります。ゆえに、いつしか親しみを込めて、だるまの型彫り鉄つあんと呼ばれるようになりました。鉄つあんは、塗師の仕事や重箱の塗り直しをしても、だるまの木型彫りをしても、あまりお金には執着せず質素な生活であったそうです。また、ごまかしたり、人にへつらったりすることの無い堅物であったようです。その後、鉄つあんは、昭和12年7月27日75歳で亡くなります。墓石の正面には葦名鉄十郎盛幸之墓と刻まれ、妻ヤスと共に常安寺に静かに眠っています。

3. 親子二代の木型彫り師「松本由松・まつもと親子」

鉄つあんの死後、常安寺前に住む松本由松が葦名鉄十郎盛幸の型を見ては、よりいっそう工夫して型を彫り、顔の幅も広く、背中の張りもぐっと出た福々しい丸みのある型を作り出します。由松の作った丸みのある型は、景気の良いものとして商売をしている人たちの間で商売繁盛に繋がると大変重宝がられるようになりました。由松は、その後いくつかの座禅達磨を彫り、その一生も葦名鉄十郎盛幸と同じく木型彫りに掛けた生涯でした。由松の次男も父同様に型彫りをしますが、若くして他界したため、型彫り師としては、あまり知られていません。しかし、特に異色のお多福耳のだるま型を残しています。この父子の作風は、福々しい作風として、だるま職人の多くから親しまれていました。また、由松の残した最も貴重なものは、だるまの型の寸法書です。小から大までだるまの大きさを細かく割り出した貴重な資料遺産となりました。

高崎だるまの特徴

達磨は、菩提達磨と言われインドの偉い僧侶の一人です。インドから中国に渡り嵩山少林寺と言う寺で9年もの長い年月坐禅を行ないその悟りを弟子に受け継ぎ禅宗の祖とされる方です。今、世界中で坐禅を行ったり、禅の心を求める人達が沢山おられますが、皆さん達磨大師の教えから悟りに近づこうとしているのだと思います。日本の「だるま」は、その達磨大師を形作っています。始まりは、1800年代の江戸、現在の東京です。江戸で疱瘡（天然痘）が流行していた頃に「だるま=darumadoll」が生まれました。現在の新型コロナウイルスの様に沢山の人が病に苦しんでいた頃の

高崎だるまも『眉は鶴』『髭は亀』と大変縁起が良く、日本における吉祥を顔に表しています。口はまっすぐ一文字です。とても迫力がありますね！



NHKで放送された時の画像を提供していただきました。

時代を想像してください。その病に苦しむ頃に、赤い法衣「僧侶の服」を着た偉い僧侶に人々は助けを求めたのだと思います。達磨大師の着ていた法衣は赤く、赤は病除けの色でした。祝福の色でもあり病除けの色の「赤色」に人々は「病気が治る様に願ったのです。」また、起き上り小法師と言って倒しても起き上る「不倒翁」の様に底を粘土、上を和紙で作し、病の床から起き上る「病に勝って元気に起き上がる」様に願ったのです。偉い僧侶である達磨大師と赤色の法衣、倒しても起き上ると言う不屈な精神への考えから生まれたのが日本の「だるま」です。だるまは赤くて丸く、手も足も法衣の中に入れてひたすら坐禅をしているお姿です。日本の高崎だるまは、山縣友五郎という若者が文化・文政年間（1804年～1830年）の頃に疱瘡の病から人々を救いたいという思いから生まれたものです。今日まで、高崎だるまに込められた特徴は変わることなく受け継がれてきました。眉毛は「鶴」、髭は「亀」、「松」の縁起の良い三つをお顔に表現した高崎だるまは、別名「縁起だるま」「福だるま」「祈願だるま」とも呼ばれ、描かれた髭には縁起の良い意味が込められ、親しまれてきました。だるまの里と言われる高崎市は、昔から、養蚕が盛んな地域で、蚕は繭を作るまでに4回脱皮しますが、蚕が古い殻を割って出てくることを「起きる」と言います。起きるといふその言葉にかけて、養蚕農家では七転び八起きのだるまを大変縁起の良い大切な守り神として奉り続けてきたのです。病除けから養蚕の大当たりの願かけに、そしてやがて一般家庭へと広まり、さまざまな願かけが行われるようになりました。だるまの両肩に家内安全や商売繁盛、お腹に福入などの文字を入れて願いを込めて奉ってきました。人々は願ひ事を込めてだるまの左目から自らの手で目を入れ開眼します。願ひ事が叶うと右目を書き入れて感謝するのです。誰もが健康で幸せな日々を送りたいと思っています。誰にも願ひ事があります。その願ひ事への後押しをしてくれる存在が「だるま」です。世界が平和で安心して暮らせる日を願ひ続けたいものです。

8月9日・高崎だるまの日宣言文補足

高崎だるまは、昭和30年の高崎市との合併まで豊岡だるまと呼ばれ、江戸時代の後期、文化・文政年間の頃に上豊岡村の山縣友五郎によって生み出されました。友五郎は若き日に人形職人を目指して、武州や江戸の人形店に修行に行ったとのこと。

当時江戸では疱瘡が流行り病となり、赤い色が病除けに良いとされ、江戸だるまが病に苦しむ庶民の傍らにありました。友五郎は、郷里である上豊岡村に戻ると人々の病除けを願ひだるまを作り始めたとのこと。友五郎は、その後たゆまぬ努力を重ね技を研ぎ、縁起の良い郷土のだるまを作り上げ脈々としてその技法を伝承してきました。また、江戸幕末から明治に入り、だるま木型彫名人の草名鉄十郎盛幸が上豊岡村に住み着き、生涯で何百体ものだるま木型を彫ります。山縣友五郎のだるま作りの技法と木型彫り名人の草名鉄十郎盛幸、そしてその後木型彫りを継承した松本由松親子のおかげで、私たちの郷土には、沢山のだるま職人が育ち、高崎だるまは、時をかけ人々の心に寄り添い、子から子へと受け継がれてきました。先人たちのたゆまぬ努力と想いを代々のだるま職人が受け継ぎ、いつしか日本一のだるまの産地として高崎は「だるまの里」と言われるようになりました。私たちは、こうした長い歴史の中にある先人たちの想いと努力を決して忘れてはならないと考えます。また、先人たちの努力の積み重ねに感謝をしていきたいと思ひます。今や高崎だるまは、全国のだるまの産地を牽引し日本を代表する文化として海外でも紹介され、故ダイアナ英国皇太子妃が来日の際には高崎だるまに願ひを込めて目入れを行いました。ローマ法王が来日した際にも高崎だるまがプレゼントされました。万国博覧会でも日本館の中で高崎だるまが紹介され、実演コーナーも設けられました。欧米では、禅の教えや文化の広まりの中で高崎だるまに興味を持つ人が増えています。東南アジアの仏教圏、特に台湾や中国などでも関心が深まり、平成27年からは両国での商標登録を受けています。国内では、群馬県指定のふるさと伝統工芸品の認定を受け、また、地域団体商標登録「第5003697号」で『高崎だるま』として全国唯一だるまの地域ブランド登録を行っています。群馬県ふるさと伝統工芸士には現在5人が選ばれ認定を受けています。また、歌手の坂本九さんは、だるまの里を訪れ組合員の皆さんとの親交を楽しみました。山下清先生は高崎を訪れ高崎だるまの作品を残しています。高崎だるまは、鶴・亀の縁起の良い髭の形から縁起だるま、両肩に願ひを書き目入れを行うことから祈願だるま、お腹の福入の文字から福だるまとして全国の皆さんに親しまれています。この高崎だるまを作り始めた先達、山縣友五郎に敬意と感謝を込めて、彼の亡くなった8月9日を職人から職人、子から子へとバトンをいただいたメモリアルな日と考え「高崎だるまの日」としました。これからも、縁起の良い町・高崎のシンボルとして、かけがいのない宝として市民、県民、国民の皆さんの心に寄り添い大切に育んでいきたいと思ひます。そして、日本の文化として高崎だるまを世界に発信していきたいと思ひます。私たちは、だるまを通して世界中の人々が平和で平穏に暮らせますように心から願ひます。



峰岸さんのだるま館・展示館には圧巻のコレクションの他に、大変貴重な資料や昔の写真なども展示されています。

だるま屋通信2回目の掲載になります。今回も楽しく読んでいただけましたら幸いです。今、荒井だるま屋では、製作時間も増やしつつ、暮れの販売に向けていよいよ日々緊張を持った毎日を送っております。毎年心待ちにさせていただく干支のだるまは今年も10月中の販売を目指して絶賛製作中です。発売日につきましてはまた告知させていただきます。次号もお楽しみに！